極めて秩序ある友好関係：
同盟体制下の中ソ国境、1950－1960年

セーレン・ウルバンスキー
（フライブルク大学）

1950年代に中ソが共有する国境地帯で敷かれていた二国間同盟体制の持つ意味についてはこれまで十分に研究されてこなかったが、本稿ではその点を考察する。アルグン川国境および隣接し合う満州里とザバイカリスクを事例研究の対象とし、鉄道協力関係および国境地域における様々な接触領域について探る。20世紀のほぼ全体に亘り、中ソ国境は分水界のごとき役割を果たしていた。いろいろな意味で、1950年代は分離の方向への新たな一歩であった。協力と友好の政策は国境地帯の住民同士の接触にはほとんど影響を及ぼさなかった。国境地帯を通過する国際貿易と、中ソのパンフレットや新聞で喧伝された満州里駅およびザバイカリスク駅での「友好パフォーマンス」を別にすれば、1950年代には国境を越えて接触する機会は乏しかった。

友好という聞こえの良い言葉が示唆する内容はさておき、研究対象の期間において、国境の両側の地域は実際には同質性を高めていた。1950年代には旧ロシア移民やソビエト市民がこの地域から移住し、あるいは中国から本国送還されたからである。満州国時代に比較すると、中ソ国境での国境を越えた結び付きは間違いなく強固になったが、1920年代後半までアルグン川の両岸の人々の間に存在した経済関係や親族のつながりに比べればまだ弱いものではあった。

同盟体制下においては国境貿易ではなく国際貿易が活発化した。国境地帯の交通ルートを、財貨はただ通過するだけであった。貨物の積み替えはザバイカリスクと満州里で雇用を生み、これら国境集落が発展する結果をもたらした。ただし、人々は自分たちが売買するためではなく、品物を積み替えるために、これら隣接し合う町の中で雇用されていたのである。1950年代に国境を越えた結び付きが存在していたとしても、国境地帯の住民によって非公式に確立された関係ではなく、中ソ両国の政府が導入し、管理する関係だった。

従って、1950年代における国際的な越境経済は、1930年代初めに消滅してしまったかつての地域的国境経済と似たものではない。国の統制機構を超越した人と人との接触が、かつては相当に存在していたのである。結果的に、国境地帯の経済・社会文化的構造が同盟体制の下でそれまで以上に緩んでいくに従い、中ソ間の接触領域はますます狭くなっていった。厳重な統制は理由の一つでしかない。新しい移住者の多くは一度も国境を越えたことがなかった。相手側の文化に不案内で、言語能力も不足していたことから、多くの場合には隣人に無関心となってしまった。国境を越えた交流には国の許可が必要だった。両国

の政権は国境地帯の人々が非公式に接触することを恐れていたのである。ただし、語弊のある表現ではあるが、互いに疎遠になった国境の住民たちは、かつてないほど近しい同志になったように思われるという点において、当時の二国間関係の全体的体制にうまく適合していたと言える。